

「ところ「まちあるき」がちよつとしたブームで、「まちあるき本」もそこそこ出版されている。ただ、地形を手がかりにとりか、古地図を手にとってといったアプローチはあるものの、都市プランナーの目で見たまちの読み解きのおもしろさ観点からの本がほとんどないことにかねてより不満を感じていた。

そこで、出版を念頭に、まずは県都を対象に、都市形成や地域開発の歴史を頭に入れて、じっくり歩いてみることを始めたら、これまでとは異なった視点からまちの個性を垣間見ることができ、これが意外におもしろい。

たとえば、アーケード街。

これまでは、ともすると時代遅れの薄暗いシヤッター街の代表例のように思われてきたが、じっくり歩いてみるといろんなことが見えてくる。

そもそもアーケードという心齋橋筋のよう一本筋のものばかりを考えてしまうが、実際はそれ以外のものも少なくない。L字（松山）やY字（徳島）もあれば、S字（鹿児島）やT字（大分）、T字（高松）などである。なぜか西日本に集中している（そもそもアーケード街自体が西日本に多い）。

大半は歴史的な経緯からそのようなアーケード街となっている。高松を例にとると、T字の交点の所はかつての堀にかかる常盤橋のたもとで、ここが各街道の起点となっていた。つまり

各 人 各 説

都市のおもしろさ

東京大学先端科学技術研究センター 所長

西村幸夫

Yukio Nishimura



三方向へ延びる街道筋の形がT字となって今に至っているのである。

また、富山や神戸・元町、岡山、広島のように、アーケードが江戸時代の街道筋というところもある。特に広島の本通りはもともととの山陽道で、賑わいの中心軸でもあったが、原爆でまち全体があとかたもなくなるほど破壊されてしまったものが、戦後、アーケードを持つ中心商店街として甦った顕著な例である。

通りの賑わいそのものが復元の慣性力を持っていたかのようだ。

実際に歩いてみると、県都には割合元気なアーケード街が多いことも分かる。アーケード街もまだまだ捨てたものではないのだ。

考えてみると、ヨーロッパにははじめから街区に造り込まれたガレリアやパッサージュはあつるものの、目抜き通りに覆いを掛けてあとづけで室内化するような発想はないのではないかとすると、日本のアーケード街は繁華街の自助努力の日本的な表現としての個性を持っていると言える。それはまた、目抜き通りの歴史をも表現している。

本コラムでは紹介しきれないが、こうした論点は、アーケード街のみならず、駅前大通りなどがどこを向いて通されているかなど、さまざまな都市の要素について見いだすことができる。

こんなことを考えながらまちあるきをするのは、じつに楽しい。